

### 3 単為結果性ナス「あのみり」の現地適応性について

情報提供：中部農業事務所  
澁川地区農業指導センター

#### 活動の背景

ナスの半促成栽培において、2～4月の低温期に着果を安定させるために行われている植物ホルモン剤噴霧処理は、大変労力を要する作業のため生産者の大きな負担となっている。また、花粉媒介昆虫として導入されているマルハナバチやミツバチは、特定外来生物指定に伴う施設外への拡散防止対策や購入に要するコスト高により、農家の経営状態に大きな影響を及ぼしている。そこで、(独)野菜茶業研究所で開発された単為結果性ナス品種「あのみり」の現地適応性に検討するため実証ほを設置した。

#### 普及活動の経過

単為結果性とは、植物ホルモン剤処理や花粉媒介昆虫を放飼しなくても、着果、果実肥大する現象で、「あのみり」はこの性質を有するとともに、果皮が硬くつやがあり、店持ちが良いことから品質面での評価が高い。澁川地区農業指導センターでは、「あのみり」の現地適応性を確認するため実証ほを設け、品種特性の把握や地域適応性について検討した。



図1 果実の外観  
左：「あのみり」  
右：「式部」

#### 普及活動の成果

実証ほの結果から、「あのみり」は慣行品種の「式部」と比べて、収量はほぼ同等であるものの、果実が安定せずA品率が著しく低かった。(表1) また、「あのみり」の果実の肥大は収穫期が近づくと急速に進む傾向が認められたことから、収穫時期の見極めが必要であることがわかった。

実証ほを設置した生産者からは、省力化できる可能性があるため、収量が若干少なくても良いが、A品割合が少ないと経営的に不利であるとの意見が出された。また、側枝の発生が少なく伸長がゆっくりなため、整枝せん定作業の省力化が図れることから、高齢者による栽培や大規模経営に向く品種であることが示唆された。

#### 技術のポイント

- ・着果促進のための植物ホルモン剤処理や、マルハナバチやミツバチなどの花粉媒介昆虫の放飼が不要になることから、作業の省力化やコスト削減につながる。
- ・果実のA品割合を高めるための栽培技術の検討が必要である。

表1 月別収穫果数

	あのみり	式部
	果/m <sup>2</sup>	果/m <sup>2</sup>
3月	0.9	0.7
4月	6.2	6.8
5月	16.4	22.6
6月	12.6	11.1

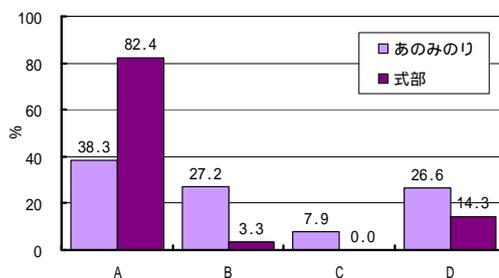


図2 収穫果実の規格別割合